遠嶋御百首

へ4
5048

へ4
5048

遠嶋御百首　後鳥羽院
土御門院御百首
順徳院御百首

百首部六冊

昭和二四年一月三日寄
高田早苗氏贈

後鳥羽院御百首　遠嶋

春

霞ゆくたかねを出る朝日影さすかに春の色をみるかな

墨染の袖の氷に春立てありしにもあらぬなかめをそする

[illegible]の江の[illegible]山河の氷とけて春あれはおゐ

もゝ千鳥さへつる空はかはらねと我身の春はあらたまりつゝ

[illegible]人のすそ野の霞[illegible]つゝ

[illegible]小野山の庵もあれまさりて[illegible]

根芹つむ野沢の水の薄氷またうちとけぬ春風そふく

限あれは垣ねの草も春にあひぬつれなき物は苔ふかき袖

春雨に山田のくろを行しつの[illegible]

[illegible]

浦山し永き日影の春にあひて伊勢をのあまも袖やほすらん

[illegible]

[illegible]春に思はぬ[illegible]桜の色そ[illegible]

[illegible]月や[illegible]

なかなかに[illegible]

春雨に花の[illegible]袖に[illegible]桜は[illegible]山の[illegible]

[illegible]桜[illegible]の花の夕[illegible]

墨染の袖もあやなくにほふなり[illegible]

[illegible]

[illegible]月日は[illegible]岸の[illegible]

夏

辛ふそや太夫人のうへ法論むりあまられ夜衣の郷

○おもてを見る郷に風ふきて若れ秋のりにかゝる花

○さとや素れ神絶え梅村雨よふるや了菊多く了つる花

○五月雨山田のさなへ雨もかそてさつき雨鳳凰なく郷の帆

○あやめふくのきはの軒ふ風きよく志ら露おほくむる雨の露

○女はなそてそむ光かそて志世中を何とかゝる梅山本さゝき波

○不月夜子池の沢（ここに）や増れ見んまゆれ紀葉残にゆ多出つ浪

○清ふ水よ老木もいまやくらすむ枝はそれにねよるら梅村雲

○難波江やあま人のおそく縄焼も立ぬ数多月夜の法

志たくゆうむらひの森の数を史へ不思ふるもあうひ杉く螢の郷

○あけぬれはわのふくるや後氷鶏光の袖さえぬ曉かんむ

○夕立の晴ゆく峯の雲（くの）間より入日うつし出露の玉篠

松ふきて見ゆ河の葉こそ涼しき螢数そふ海人のはゝ火

呉竹の葉末ふきたつ涼風に安閑や白菊ある皆月の法

みなつきに来る人もなき夏衣も日も松ふ露の山とるもの

穐

かぜ吹きの岩根をかけ胡葉の風も秋はたまらぬ

萩の花夜萩の葉の露に志ほれて物おもふ袖と誰かふてなん

○蝶さえていはて思ひやまふ人も袖や露やおけ

○おもはぬ鹿も世葉なと袖そてねむる林の夕を

さ雄の山下みかえ海のかすそ玉ぬきこみしる萩の朝露

加州と云の詠歌に
○いふもむ菊とふ杜の時雨
○法華寺わの海や色は
伊勢にて
見もしらぬ郷の
○あるとしの
晴と云
○墨の色
冬
○み世ふる
○冬ゝ
○霜ふる
○神無月時雨
おのゝ
○去年
ぬるとて
○
○
○
○

あさましとそこうみ心もの初とのまくまうまれ風おろす迄

新田心海ふ木のもと梅ちりて梅花に鳥に木葉の色

なを忘ぬ弟こうれなくめ海色紅葉ふ人わ海ふ心人

○みちとの海ふ山田あさかく書木枯とうつむ雪

○心色の清ちれやそ梅ちて梅まふ海まの常花白雪

○されやや仏の花おれせまり書この枝ふ法海梅雪

と頭ちれ仏あふつむ梅いまるむ雪の枝木

○奥心の海の庵やあまぬんちたぬ嵐ふ

○やそふ年花雪ふ海ふ雪ふ梅のいとみ海

雑

○古のはまりもむの紅葉やふ海ふ紅の秋と染めて

○ふまひよいろ秋ふ秋の紅ふ秋ふ紅ふ紅ふ

ふ海ふ紅雲のふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

○海間ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

○里書こ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

○長海と海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

暁の海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ海ふ

○ふる年月さへそうめ世ともなれ思ふ世ハ
○夕月夜入江の蘆やみちぬ潮せ亀の声に葉の露ハ
○松風の浦ひとわやきたるさを千鳥鳴初浦ふ秋の松せ
月ふそへくもをうそ海ろ寄ハらろ人ろ見ぬ桜ハ
何ゆ見ぬ者ろふ秋ぬをて記ちめ物も法光ろ初
人人ふもいりむりしわ車をとてくみちふ秋ぬ
○ふの海と月ふおすわ出ぬんたさのかしまふ波ろ
○今世ふ光むろのやをまもうをれ思ふ秋いふ海ん
○時なる秋ハ浮雲ハ落ふくまふ我世の月の影ハ
京ハ海ふ岩浪ハうを記ふ野川ハ世中思ふをて
をとはをん都をそをはをそれ春の風ハ海なむ雲

○ふるに人の涙ハそぬ袖ハ秋ハ散ハ秋ハ続ハ
古々の若ハ花ハ梅いけるおのをあ秋ハ思ハるむ
男ふ人のをれもふやなるをむをふをるふ初ふ海
月れをふ新海ちるを松風の波ハ初光ハ風ハてハけ
風ふふをるの波月やをんををを秋の男ハ海守
○をふ人すふやふ秋ふをもの人ハ光月思ハをれ和ふの浦ハ
○をを海れ大ふ人の涙ハふ海ハをふ海のをを魚せあを

土御門院御百首

朱點 定家卿
墨點 家隆卿

春

立春

鍊

あさぼらけの霞の衣河ぞあてけるかぬ色もうすくあらはれぬ
了見如本歌しかるに詞新及其實清艶員也

同

白雪はまだあるかの野べの小松原ふるきをのこすみてかりの
子日心さしふるきをのこすみてかりけるこまの宮のむかしをしのん
義理おかし詞美麗作

霞

ふるさとの春のそらかすみてをかの柳の糸のうちなびくかな
下句珍賞花麗

続後撰

鶯

雪の中に春はなけれと鶯のなくにそ人のおもひくらむ

あかつきのまくらにきくや初音こそ誰かわかれ路（わかれやイ）

続古

若菜

誰ためと春の野沢に我摘めは野沢の水に袖ぬるる道

心詞 スナホ 質おて寂上手のしるしけるおけりイ

続後撰

残雪

埋木の春はおやのならんあさ日かくれの谷は暮て雪（冬イ）

おほくの人 昔より 埋木録するぞ代々しらんと誹（続建にてもこれなの心にはけりけりそイ）

兼さり定あり

梅

梅か香も誰かおとなきそら奥山の松ふく嵐の夕風

丞相雖個別普通當世作也（ひとつりとるんおしイ）

柳

鶯のねくらとしたる糸柳よそめに見ゆる山もとの青柳

早蕨

朝みとり若菜のうへの春さきてひのもとゆくる春日野の蕨

桜

見る人の世の花もあらしにさそはれて春の山さくらちるをしも惜む

如法秀逸也

春雨

鶯の木の間もとめて春雨のふるえはなれぬ宿そ知らるる

雖不作

春駒

難波潟ちかくハみて志せ色も今め絵めハやそ朝そ浮さる

これまたくしんつうみイ
此上葉こそ神妙てしく

帰雁

吉野の花に別なき霜の羽いゝすゝの人へ帰てなく論ん

面白作〻

喚子鳥

まねかくの招きハ山のよふこ鳥春ハ小ゝ人の伝

ゑさくしやすかは有るゝ有るえイ
いかにも面白事がら此作ぞ類不露おかる

お佃しゃすめる

苗代

氷水すこし山の志ゆきとをぬけて苗代水ふさく浮そん

あさるそイ
猶ニ浅猪よく作

菫

咲されつゝむ春雨原の種かあまハ付紫に染やぬまさるん

そめ三そイ

杜若

春風の池吹ハ梅浮の人ゆゑの綾か宿る杜若の那

是等の趣向こそ志ゝ浮ゝ川ま

藤

咲ころハんとちれ春浮るゝ人つけて打て〻かきん袖やぬまさるむ

歎人とこ〻ろたへのをもみて打まぬ水に袖やぬまさるん　伊勢

技抜擢

浮く成てのゝ山吹き思しよりおもまさぬるよくはるく也

あかうしのくち

三月盡

吉野川毎年毎年今日ハ花の志ら波たてふせぬ

夏

更衣

侯古

ひらのまてるれ枝の花ハふるすすけ衣夏むの郭

卯花

月毎てしのしらけるなら人ハ橋ちる志庭のうの花

葵

あふひ草ちりてそ時ハ神しの葵ハ花ものこりなれ

郭公

時ちるなくや卯月のあ志ら志のひしてはなれのこ志

詞安神妙

菖蒲

夏の池乃ぶきのくれあやめ根ハ波風ちるふ所に泊そこ

早苗

つ苗ちる伏人のさしに毎てむらハの山ハ雲そくちる

山むらしゆ人心ハいろふ山ハ雲そ見ぬ詠しこ

えこすおかけうなくい

雲人ちくれて不見人ハ雨とふ富士ハ

照射

やちくさ志ちすすこふ志庭ハ

五月雨

四

花ゐ川にかけもてやはわきもこらがたもとの香ぞしる

扇橋

あをとこ光　彩の橋ぶちうてむかふ　その夕雲

螢

夏の夜は我行くみちのくれもわの手ちかぶ螢うつ

数をつくしてまつ宵ぞ　ちるかつまてつちかトもえはせん

夏の夜は雨はふくゆうの風　月の光の旅もとろ　明ぬるなり

蓮

風のはなに流るる水ちるまとれ数　うつ貴いさらもの月

氷室

くるとあくとあくとめるれぬ　ものそさくらむつの人まこうつろひぬん　業定

くるとあくとこんの色　おの宮心いけるるまつ　谷川のみ

泉

結ぶ泉のまき　水とふむ　岩水　結ぶて

六月祓

切麻　秋　吹く　はらへ　ものもの　祓　ふる

秋

立秋

小篠原　風　吹　ふる　足川の　浦　やう　秋　まふ　ふる

七夕

秋　ふる　あ　の　ふる　ふる　涙　の　ふる　ふる　見　合　の　秋

対鶴〳〵

萩

萩の花ふりつる庭の雨ふる下葉に露ぞ散ちける

女郎花

たをやめ[illegible]の袖の露ぞ乱れ初ける

薄

落ちる秋の野風いるむしの鳴虫なれぬ[illegible]

苅萱

心ぬやくまぬと思へば[illegible]

蘭

露のぬきあらふ[illegible]藤[illegible]

萩

夕されば[illegible]の風の目ふきぬ秋とし[illegible]

早鳴

[illegible]の[illegible]の[illegible]の上ふ

鹿

[illegible]月[illegible]

露[illegible]

[illegible]の[illegible]

霧

[illegible]

[illegible]の[illegible]月

桂

[illegible]の[illegible]

[illegible]

おもかげ（の）ゆく旅人のあゆみとゞまり行方知らぬ哉

月

続後撰

秋の夜も良深くなりぬ月の光のくまなきかゞみ

椎衣

ふる雨ぞ袖の露もぬれまさる我むとやまろも鳴蟲

虫

草もみぢ秋やもゆらん紅葉のかゝれる枝の下ぶすくなり

菊

おてえいはちをとあつさ秋霧の枝もたわゝにをけるきくの

紅葉

ちくさの色の紅葉をそこ紀都の時雨いろしん

九月盡

今日をこそ秋の名残と惜めなれ明ぬ夕暮ぬ別て惜まれ

冬

初冬

ふきうけて冬やとりをみち葉の鳴りかなて隨ふ

続後撰

紅葉ちる時雨ありくと志て秋の宿の乃も風ぞ冬ぶ

時雨

吳竹のみちの時雨ふりぬ袖の露ぞ

霜

立田山木ぬ葉もあらふ霜ぞ置

霰

続後撰

ちるまて時雨志ぬて八法里なくて霰ふる明くれ

是等をそなへ可思議々々きこの人ちんてん
の子孫

雷

[illegible]みの心[illegible]者[illegible]ふけて[illegible]一人の者[illegible]ども 忠孝

[illegible]心と[illegible]ん[illegible]人の[illegible]なし

寒蛙

[illegible]行[illegible]蛙の[illegible]

千鳥

夕雪の[illegible]

氷

[illegible]結[illegible]

貫之[illegible]勝[illegible]

水鳥

[illegible]鴨の[illegible]

鋼代

[illegible]本[illegible]

[illegible]普通の[illegible]

神樂

[illegible]八十氏人の[illegible]神代[illegible]

鷹狩

[illegible]

炭竈

[illegible]

山のこなたにかくあまたしらぬ人へ

梅火

むさし野の草もさむく見えぬ曙の霜にぬれぬる見はて火の心

歳暮

ふるとくれてゆくとしをあまの川ながれてはやき春の日暮

戀

初恋

おもひそむる杜の木葉に物問ふ人ぞ忘れん

忍恋

後拾遺

こゑ高うかぜ吹川の夕時雨ぬれてみて袖のあるに心を

不逢恋

ふりはてゝ涙の川のなかや世の中

後拾遺

あさてあり波のゆくへいかなりしなれぬ心の中乃濃淡を

初恋

新拾遺

ぬれぬ袖の名をもいはぬ人の家ぬれ墨染

忍恋

わすれぬやいつ新しき明の袖よわるくふこ雲の空

さ寝ぬ夜のこゝろ人ぬれぬ袖のあるもこれぬ人ぬ編殿作

逢不會恋

新後拾

月ぬれぬ花のはやうはちらんぬれぬ袖の名ぬ那

旅恋

あまくもりやくみのゝ雲をけふゆけとみるいかくれぬ月雲

ゆくへいくとも海のあさ水のあるひなる袖やこゆん

思

夕暮ハむらさめの白露も思ひわきてや袖におくらん

忰思

錦繍やみかさに川を見わたして志ばし袖にそゝぐ

恨

続後撰

浪ちる袖よまきく浪の上に秋風吹とおもひつる庭よ

雑

暁

君か代の数よくらへても暁志ぎの羽かきの数

松

千代も岩根の小松秋をへて嵐も露も冬ハかくる次

竹

くれ竹のよわたる月の影そひて葉末の風や雲をはらはん

春

むかし見しすゞミしんなならで衣岩ほの中よ春ををしまん

石床留洞嵐空拂玉案抛林鳥獨啼桃李不言春幾暮煙霞無跡昔誰栖事以人あらためて文時ゝ再誕欲葉と氣持儀

鶴

河の川の流にふる雨やまたむらさき鶴のあそびてそ鳴

山

岩のよこつゝじ山の桃花ハくれてみて緑秋風の梅く

河

弱みそひのくま河の水屋もさへ（い都も）秋風うもく
さのくまひのくまの弱みもてさりあるくけをさに月
野
武蔵野やこのさるの見月とさてと松をまれ松むきも
岡
浦風よしまの舟戸やはめん暁結て千鳥なくなり
橋
をとさまこれこの古みちいかるは絶ていはい美れ紀の
海路
かさをひの浦をくしの夕雲るいやとはさふかるをさを
藤
かをろふれとの主志為ふるるはふりるや結ふ秋の藤人

別
初雪ふるの宿を彩毎のをぬ別るる雪うち
山家
夕雲ハ秋をむしの秋風もをれををる作れ吹るう
田家
いふ建る稲ゝ和歌の居る風風月ふ入れ雪の純
懐古
秋の名を送りむる面て雲れ立るる物月も忘れ
されこををを雪心度物をしいはりをふ
おをあを俺く波る桜きいをせて分道沢
ふてをこをり平板部成千万彩あを海き

十一

寄月述懷

被破失に

あかさるゝ月をはらへとおもふかな

夢

ねる夜のみちはいまはらへしてあるまゝ

むなしき夢のさめてイ

無常

春はなほ物のあはれをかけそふる紅葉をとゞめまほしき

述懷

静なる心のゆゑと久しきの空よりくる秋の月かな

祝

あま雲のゆくへもあらぬ山のゆゑ来ぬ人をのみ待つるかな

本云

定家卿家隆卿の許へ人々歌をこゝ

迄詞書にて百首寄定歌に私

扶本

これハ新院の御歌にて家隆の名を色

ばかりして女房なるべし百首にそんして此

作者点あり

朝あさの
さくらたゆめ
あまみちる
みよしの
春風の
きめよまて
ちりこそ
なのよは
いろかる
なるれの
ゆくへ
すてきける

花の比の

芳野川
風のもいくあくと
秋やとき
紅もちる
ひらけや

宮ばらに
雪の
紅葉ちる
すこれて
しらぬ
あかつき
面かりさ
秋のそら

一

露のぬき　夕ぐれは　峯おえて　こゑすなよ
山路の　あかつきい　くさのくれ　あかつきや
松のもと　里ちかき　まがくれ　語かにて
おく山の　まかりて　紅葉ちるハ　くれ竹の
高山　かくれて　さりの山　雨降りや
夕ぐれハ　山の井乃　そよかれ　あらし吹て
竹の本より　さへ見や　色そても　うち山の
夕ぐれくれ　おもひそむ　さくらくれ　あけて見
新枕　引すまゝや　明方の　あかすかい
夕ぐれハ　いせ海や　風のみ　かしまよ

来代も　くれ竹の　きりぬまに　あけまつの
かなしきの　朝とめて　むかしのや　海つきふ
さりての　かきのひの　明方ふの　秋さりに
夕ぐれた　いろもしろ　秋のいろと　ゆきもの
春の風　きつゝなる　あさ雲の

此句ハ左ニ言の如く旅泊の夕ぐれにてなき物とも云て泊?
宮城野の夕くれもして物さびしき人のなぐさめとなるべきところ
なれとも懐旧の御句に付すりて露世おもかげにて清?にそ
きてもかわらしかハなる物とあき海くおもかりされ
まけて給ふ御題にて露に戴来千万代あき海ときまつハ
おとしもさ清きあ海しくれてさくら後先に
　　懐旧御返事　　　定家
あかきまし月もきら程に松よ先白き姿にくれちや

別段

すべてよきことかなりとてんまちうけ
たてまつる　家隆の歌思ひくらべ
ぬ

家隆卿歌九十三首長二十九
定家卿歌百首長十二

無題

たちつづけてとしをへぬるかなとよませ給ひ
のちく見せふけのふされたちまちに見めぐらし
思ひ寄て　おのづかられい御制作のうち
の御のもとしふりてる　て定家卿ト
ものたちつれい今歌して薄雲人の詞なと
の御ふとこころ　ものふ

秋のいろを送りもしてこのうちに見るものはなに
はいかなみくしてに御製のうちとまりて　おとろきおそれて
うゝ書にきゝくの迷情の詞　ものきゝそ
あるとて　月ときそい　ものうちぬるこもやとれぬふ

ゆよかの作製いとをかしのの　月もみてくしたくれ
ものくあるきあるけいるとあるのるひ
ものをそ後のよくきるあるとて月をこひて作るあるとて何事もよ
にすべれたるのまに見えうせぬ道のても年よりもち
ものとこむいるこひ作り　高倉の作製のもの　いとらぬ御ことと
ふや　北のゆ（ものうちの御ふかくをれの
御　もるけをしてるうとをを　海　るけると
大納言　歌　のあるも家　ふをを二京のもの（見をを作
くしこうの二京御百首のくとの　まの　をこてミ
はてられ　ふまをてをくとなるの　まるて久くみて
海とのこひていくれるいあの作製　御製
乃御ふすこ　もたのをせのいめとを姫　をのるにやされ
ものるのけをいまをくをををひける御事
好を海て南対の御製をを　海　の八いふいるをもをとを
めかの弼いまを海をれを海　をれをとあるて作り
めてたのをやされとあるて作り作り

安永十年辛丑三月十四日写之　源明頼

右此御百首一冊定家卿點并評詞池田
黄門家借之一校了　点之義同奥書写之者也
多紀元孝[illegible]

順徳院御百首

法皇御點五十七　納諸御點七首墨
定家卿判詞同點八十九　内諸點十五朱
此御百首雖有人之[illegible]
御製私ニ此[illegible]

春

風さゆる池の氷のひまをあらみみきはの下に[illegible]
風わたる池の凍こほりて鳴出下[illegible]
おもしろく首尾相叶姿詞尤調候

空は猶霞のうちに雲も見え[illegible]さす春風
朝陽餘虜暁晩風吹雪之光爾作[illegible]
龍存之首[illegible]度申

悔しき[illegible]松の[illegible]尾[illegible]雪[illegible]谷[illegible]
枯葉[illegible]松[illegible]雪[illegible]見
[illegible]心深草[illegible]景気[illegible]

うらうて感情は深い

雁渡る月入るしるしうのみなる紀ゆ素性の限をそなみる

月の出て月の光わたらうて雲の限をあらうて

こゆり心又秋 徳作

義兵衛で海ゆまに紀わ宗をあむ意性甘酒りとうても白樺

珠簾未撲罷幕 小野意樹 乗求 悌 桃席

常句こゆ其ん妖艶 玄詞 蓑 羅作

さう清めゆ川柳風あけそめ意めゆ志ゆえふうあ白浪

山才二句慶ん不学 人 俳作 妃 妖 未 陶 兎 俗 意 晶

雁 蓑 ん

あさみう雲紀恋 吹風 てうう 蓑 ゆ むのと柳

震の衣風てうう ゆ ん ゆ く 柳 絲 む と 清 ゆ く

心ん ゆ ん ゆ う ん ゆ く 作 む の と 柳 の る 油 え ゆ ん う て

夕 雲 紀 し 極 く 雨 や 雲 う れ め や ち う み う け 素 紀 子

不 源 め ん う の 川 ゆ き 雲 と り の 川 や と 意 ん

詞 仙 て ふ め 清 し く ん

海 う う 海 や 秋 よ か ち う 海 ん 野 と の み う 紀 て 楽 ゆ く

萩 の う 梅 紀 雲 ん よ う 色 て ん め ち う の ゆ と ち む る

十 二 古 米 ち ん 紀 む り け う 風 情 興 味 意 極 ん

秋 色 ち ん そ ん ち う 清 の 国 ん 生 田 紀 素 素 紀 吹 の

いく 生 紀 春 の 妹 生 ん 斉 清 流 備 都 の 才 子 ま

か ち ち ん ふ み ち う ん と 素 の 曇 り け し め て 弱 豆 眼

二

詞花　春とをしとはいへど桜はの玉の井の春の秋の初風　清風

後拾遺

花さそふ嵐の庭の雪ならぬ春の名残を見てやすらふ　あるい

俊成　清輝　千載

雲居にまがふ桜の花の白雪の月の宮の桂の枝の雲ぬ

月乃京氣煙　巫　超　巫　ところ　風さ　絵

後拾遺

雪とのみ桜の花の散りかひくれば春の名残を見てやすらふ

雪ふる桜の花の白雪の月の宮の桂の枝の雲ぬ

しるべかなめはるばる　主　興作上

千載

春の海の浪の桜とこそ見まがへぬ雪もなかれぬ

もれ桜とは咲きぬ　いと

の春の花の白雪の月の宮の桂の枝の雲ぬ

結ひあまぬ春の名残を見てやすらふ

須東京中用　落もこ　二　八旬　美紅　栄黄　落

こ無思　こ　こ　湯陽　こ　こ　枝　こ　こ

めるまり作　「百ナシ　拾中　泣下　誰最多　江別　司馬　青　祇　濕

新後撰

春の海の浪の桜とこそ見まがへぬ雪もなかれぬ

ふるの花の白雪の月の宮の桂の枝の雲ぬ

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

風雅

ちる海川春ゆくかぜの名残をとめて

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

新後撰　落　湯　川　ぬ　く　佐　年　米　思　給

千載　伝　俊　千　典　モ　玄

はるゆくかぜの名残をとめて

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

春の海の浪の桜とこそ見まがへぬ雪もなかれぬ

流てまつ音おかしく流くれ
河上にひの山風ますくはひきり滝しぬ岩流しくる
はなちもれ山青字あうたれいて紅躑躅のまじ社女
色ふかき声をき山林深き所へ

河の瀬に秋をやのこし紅葉ちるらむ山吹のかげ
なまめかしき色古来歎きて文添（よこ）（ナシ）て不一思ひ侍れ

新後撰
此里にあまたの秋を過ぬ流れも柳かげ行の藤の波もちらさじ
五句非新造（言）風情なれ出来ぬに此事猶難念

悦目作
みなとやきなけ来て風冷（ムイ）のよふて鳥川守ふさ滝の紅葉あ流（も）
流れふさまぬ春夕流も又三月尽ふかん

のこんけれ毎夜鶴暮眠作

夏 十五さイ
山城のとはの杜いかなれて下草いかく夜いせなかき
下句又珠多作

流しもまし川の尾山はあなひ草よるつし地く鶯子吹くん
此初文字巨文ミ説他伯ミ説相異いエミ友、出来
作且面目也

夏月の木末にまよふ深庭の雨にけまもミ移り松原にかす
風情又無味な絶句ミ清深起、不及言遊年経
以ミ子細にも不ん度と抜云流也

続後撰
いまこんふ後をぬきるの地時ちかりの月乃村雲の空（西イ）

景章又如斎照路作

五月雨は雲井ふかき紀郎の月の桂の影もくらし

更森雨に暗（晴よ）雲暮掛月に淡粧次女詞高二疏

及作

五月雨はやの汀端もくらぬ庵は猶そ紀田かりの玉の縄

五月雨はやの水かさのまさるはしもて

あやしき事まて見えし日も見え縄とくらし

出来にては人めけらし作

暮れ入日まくしき山さへのすそのをは田上まさる世

いつも見ぬ山のけしきもみえさせ庵こそ中ちかりなれ

詞も気（色）もましてれ

峰らしさては夜もいかなる山もくむら横雲

五月廿一字出来遊擲影光明照螺珠瑞ん

蛍火の燃は人も来まてとみえくる夜の月

[illegible]

暁のいふ夜の月もいたはしなる[illegible]

[illegible]

夕霞するひく山の[illegible]

春霞かすみていかなる

増興いろの手指花竹たて

[illegible]

富士の雪(ゆき)霜月の空ふき渡ゆふ心砂宮風情
又俳無感ん

樹間の雲霧(むら)ふ一葉ちるたまのと松
玉法師の細先ゝ度ゝ拙発作

夕立雲ふさ紅葉の山色の秋ようるひゝぬ雲紅葉
山風雲ふ時雨ふ雲ちゝ婦て ちらく雲紅又
ぬ眼えん

又ゝ紅葉ふ嵯峨の川ゝ松ふ山ふて白波の松ひゝ紅葉
山姿又日前

秋 二十首

時もあま紅葉紅葉年ゝ紅なふ山ふ山ゆく雲の松山

未松山年波半ゝ拙く心ふ山ふ紅葉ゝ拙ぬ
あゝ一ゝ賊ゝ賊ゝ山ふ山ふ
ふの雲ふ紅葉ゝ山ふ山ふ雲ふ山ふ
紅葉や千枝ゝ千枝ゝ都ゝ花ゝ紅ゝ
文城野原ふ紅花ゝ紅ゝ
羅ふ紅ゝ春の詞ゝ山ふ言能拙方

徐天人
人ゝ山ふ雲ゝ雲ゝ紅ゝ山ふ紅の夕暮
此世一字又毎字雅拙感ふ言ゝ言ゝ上作ふ

玉手ふ
清ゝ雲ふ雲ふ人ゝ山ふ里ゝ花ゝ山ふ秋の三月
心遊ゝ帰ゝ詠紅葉ゝ光ゝ花ゝ清ゝ

仕丁紙やのあるじ

上下しも白おかけ始まし調おく

秋毎の枝あるじ

秋毎の枝あるじ市の市にまうでしものとなる月
まうで羽織て小袖ばかりの仕丁まいて白の羽
時の京室にあるまいくらの

雲ふるものく雲ばやとれ雨ばかりもみぢ秋のよ月
白れ雨くさけやくく深きてそれば月しば
ふまめ所心又深んん所

月みぢ秋の萩乃花せ

秋さ萩ふるふ秋さめ花れく床の月新秋さめば
月 来ば上陽しく寒床ばる百姫の昔ばと

まて思ふ主高

白露ふ月の海ばと実ばる口ば神ばむ萩花ばは世
ふ心の露ばるるなかあて海ば紀神のるこも
萩のう吹ば秋ばるふそ秋ばふ秋ば
く絶て花ばる

心鳥のうこ月ば秋やはんん八月ば月花中のてそみ
秋心ばの月ばる月ば秋八月ば月
ふ秋ばうう神のる世ばもかくて作
花ばる

梅ふる籬の竹ば紀ふ秋ば月まち妹のば霧
籬乃竹のふ月ばるるなふ秋ば霧ばさ

拾遺 老ぬれハおなしことこそせられけれ君ハ千代ませ〳〵 源順

あまた度いはふ時にも我も君ハ
千代ませのおなしことや此世

山ぶきハ朝まれ松を吹風に庵の袖まもぬ秋やせさ花紀
かつ川乎野原の露 虫の音も村わかる紀婦の霜
野原の露ゆまも紗えの月とあかつき
おの思ひ青松甚光風ハあまたとみえて来た
まそこふりふたりをそての人めんなりとも心
川よりほしくや纔らむ

続拾遺 一首

げ志なれ山乃嵐もあきさえて吹そふあさき月の世
なくさめかねる山のあし月のりにふかうそへ
ゆくん樋のをそかしれまへせんかりれ川をれ

よしもとおもひもかぬ奄くやは演人
秀されハあすもきそこむ賤なくいた田にものハ紅葉せぬ
風ふくの雲の梯くてふ時なんむらくあふ貸本
ひかみ村かしりちまてと志くれなく秋せ捨あく
谷ぬらきす乃る川との桂いくはの時のかみられて年のへめぐる
已上四季詞花加之秋三家二乱詠心村毎数

保國興ハ

いそせの林んかふそくれわそふうそふ霜の井ゆるまほ
可句和続毎字村備

冬

ろ彼人の花まりむぬまへて袖

はてたる木の葉ふるひ落るなどを紅葉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]りてや作し

[illegible]の[illegible]の[illegible]の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

不似昭陽紅裏看ひらけるひろを掬る手たの
ふくるる紀掬るて神のるこ紅葉と白波
を比おれに

[illegible]

[illegible]ふ紅葉(まち)とも川の[illegible]紀るふめふ[illegible]るふか
掬る手別るるふふ[illegible]ふふ[illegible]肝入骨基沖堂
[illegible]作

雜

見[illegible]の[illegible]の[illegible]あ[illegible](ナシ)[illegible]
潮の[illegible]あ[illegible]れ[illegible]
[illegible](守)[illegible]氣[illegible]勝

夕[illegible]のあるふ[illegible]雲[illegible]
夕陽入山映雲交々[illegible]眼見に
[illegible]の[illegible]風[illegible]
[illegible]の[illegible]
川社[illegible]
風[illegible]夕冷(嶮イ)[illegible]
[illegible]の[illegible]一夜[illegible]
[illegible]枕[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
見[illegible]

十二

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此百首御製定家卿自筆判詞や片仮
餘流の秘花敷学を披詠云々而生年天下
周乱々刻猶書累代文籍教立道路々々文
仁不慮感悦々々此書写々々の元語抜本
弛筆了

以為藤卿自筆之本校合之即書入篇字有也

明應八年己未年三月廿三日　　運賢

玉本云

壬辰百首丁酉秋明静亦進遠嶋早墨法皇御點朱
定家卿沒定家拾五首ニハ諸点合手遠嶋并此
御百首以或本書寫之奥書以下大略如本然而僻案
事よみ〻以愚推直改説

天正十五中夏初八　　通勝

杜鵑や藤なるまでに
かくれ沼枝のうてなに不尋立後新緑を
おりひくまでとくても年とへぬるかなる月花をを
梅の香月雪雖此弱常被なれ
心里に新しきの松と
首尾神明不甚雖し五一首こゝろ姿所大綱を
為示教下 宗長卿 基家こゝ姿雖世樣分後古歌
詠めて志のいゆし
九こゝ無之久人世こゝ此已後世間奇紙
宗鑑 神こゝ定古新分一月白き まこと
嵐吹風

吹嵐
かひなきの心の姿に
依殊勝に合点に建保世年 百首家隆こゝのす
こゝに吹こゝ月淡無所人樣中こゝ雅
詠こゝ下条 清水 清水清泉 上こゝ分紙 所世
山こゝ怖 畏こゝ中こゝ 今 こゝ分 こゝ後 者こゝ
又こゝ風こゝ姿
為こゝ みてこゝ山こゝ家こゝ中の
三十一こゝ月 所 こゝ雖し只 依此 雖 偏し
蜻蛉蜻蛉
又 こゝ 為 神

布留社

又弥めし當初し交衣年序多當世し無極
言葉詞花無恐耳目し業体し如国埒い
志ゝ公方の了り以之陪伯身ゝ法度め湯湯、

琴琵曲

けさのゝ八月りけるに
背尾お変神ゆし但以て詞至年 諸人好
源様を忘れし不無人 沿京し四静 世事ゝ付
常好しきな就部ゝ思し
京の日はらのゝ月りゝ新
又ふれる地 松の了又四静 世事数好ゝ

一切 京はゝふ方ゝ古なり世 四 第見 巻
かゝり あるい ふ のゝ ゝ 空
いゝ ゝ ふゝ 弱し 陪 神 妙し 毎 数 容 題 年 公 忘
陪し
もゝ 面の ゝ ふゝ ゝ ふ
ゝ 素 家 容 眼 弾 真 感ゝ 思ゝ 世 ゝ ふ ゝ ゝ
方ゝ ふ 源し 了 り 侍 す ゝ て 言 ゝ ゝ ん 山 ゝ の
面 あ り す ゝ ゝ 心 久 家 世 ゝ 世 ゝ 貴 数 陪
面 出 ゝ し 松 能 費 ゝ ゝ 面 源 し 世 ゝ 陪し

玉敷

周 法 海 ゝ ゝ ゝ ひ み ゝ 立 ゝ ゝ 源 ゝ 世 家 宮 ゝ 了 ゝ 千 我

奈良の中山時鍬の[illegible]
出し元押る元[illegible]
常物に無用て[illegible]
[illegible]
[illegible]

右朱書文化十酉年月九日以大塚御門往春[illegible]
技正[illegible]書[illegible]門[illegible]